

## 企業家研究の現状と課題（経営学分野）

－ 「出発点」 「現在地」 「展望」 －

江島 由裕

大阪経済大学教授

### I はじめに

共通論題の報告者に与えられた課題は以下の通りであった。

企業家研究フォーラム発足により、企業家研究にどのような変化・発展がみられたかを、分野ごとに検証し、今後の企業家研究がめざす方向を探る。具体的には学会誌『企業家研究』に掲載された論文の内容を振り返り、そこにみられる変化の方向を指摘する。それ以外の当該研究分野全体の動向についても広くご検討いただければ、さらに望ましい。

本稿では、この点について、経営学領域に焦点をあてて行った報告の概要を記述する。大会当日の報告では、企業家研究の現状と課題を「出発点」、「現在地」、「展望」にブレイクダウンし、①『企業家研究』と「企業家研究フォーラム年次大会共通論題」の振り返り（出発点と現在地）、②当該研究分野全体の動向を広く検討するための、海外のトップ・ジャーナルの1つである *Journal of Business Venturing* の出発点と現在地の振り返りと『企業家研究』との比較、③日本の「企業家研究」の「これまで」と「これから」の展望について私見を混じえて述べた。以下、この3点に沿って報告の概要を記していく。

### II 『企業家研究』と「企業家研究フォーラム年次大会共通論題」の振り返り

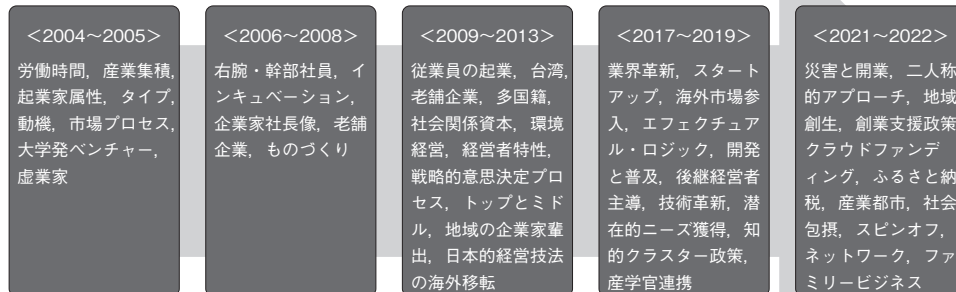
報告では、まず、企業家研究フォーラムの学会誌である『企業家研究』の創刊号（2004年）から2022年までの研究論文（経営史系を除く、論説、ケース資料、研究ノート、研究レビュー、寄稿、共通論題論説<sup>1)</sup>）に触れ、それらの中心的研究テーマと特徴を抜き出し、整理し分析した。なお、分析に際して特に注視した点は、創刊号に記された本学会誌の以下の狙いである。

設立趣旨に「『企業家』ないし『企業者活動』についての研究」を掲げたのは、企業者活動を支える社会の仕組み、制度や技術、教育、ファイナンスの仕組みなど企業家活動の基盤や環境についての研究を視野に入れていることを意味している。また、ハーバードの企業者史研究センターは挫折したが、このセンターが目指した非経済的要素、文化的・社会的要素を取り入れた学際的研究もまた継承すべきものとする。本研究フォーラムの設立にあたり、経済学・経営学のみならず、歴史学や社会学、民族学の分野の方々にも広く参加を呼びかけたのはその理由からである（宮本，2004，105頁）

このように、『企業家研究』が扱おうとしている研究領域は、企業者や企業家の諸活動の基盤や環境（社会の仕組み、制度や技術、教育、ファイナンスの仕組み）を広く含み、それは、非経済的要素、文化的・社会的要素を取り入れた学際的研究を視野にいれたもので、経営学、経済学、経営史、経済史のみならず、法学、歴史学、民族学、心理学、行動科学、宗教学など様々な研究ディシプリンの越境や広がりを見越していたといえるのではないだろうか。

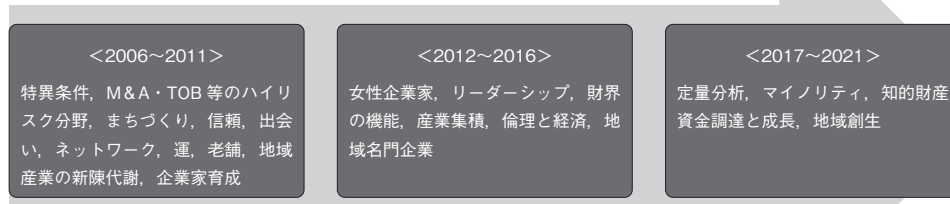
図1および図2は、創刊から2022年までの『企業家研究』論文タイトルと「企業家研究フォーラム」

図1 『企業家研究』論文タイトルの主要キーワード



（出所）『企業家研究』（創刊号から第19号）を基に筆者作成。

図2 企業家研究フォーラム年次大会共通論題の主要キーワード



（出所）『企業家研究』（創刊号から第19号）を基に筆者作成。

ーラム年次大会共通論題」の主要キーワードを列挙したものである<sup>2)</sup>。これらを集約し簡易にコーディングを試行した結果、次のような特徴を見出し、整理できた。『企業家研究』については、企業家（特性、資質、素質、思い、行為、能力、動機、タイプ）、起業プロセス・組織・戦略（参入、スピノフ、革新、ファミリー、老舗、エフェクチュエーション、伴走、トップとミドル）、地域・コミュニティ・社会性（グローバル、ローカル、創生、再生、集積、社会資本、ふるさと納税）、制度・環境（災害、孵化、政策、産学、大学発、クラウドファンディング）、理論・方法論（二人称的アプローチ）であり、「企業家研究フォーラム年次大会共通論題」からは、企業家活動（リスク負荷、特異条件、リーダーシップ、育成）、存続と成長（老舗、名門、リソース〈資金調達、知財〉、信頼、出会い、ネットワーク、運）、社会・制度（女性、マイノリティ、財界、倫理と経済）、地域性（まちづくり、地域産業・創生、新陳代謝、産業集積）、理論・方法論（定量アプローチ）である。加えて、これまでの研究動向全体を俯瞰した中では、特に、企業家（活動）と地域・コミュニティ・社会性にかかわる議論が顕著で中心を占め、そこから派生しながら周辺の重要なテーマがカバーされ、研究が前進している様相がうかがえた。

### Ⅲ *Journal of Business Venturing (JBV)* の振り返り

同様に、1985年に創刊された*JBV*の狙いを、創刊号の“comments from the editors<sup>3)</sup>”から読み取ってみたところ、興味深いことに、『企業家研究』と似通ってはいるものの、学際的な広がりとはそれほど強く明示されていなかった。*JBV*には、主に富の創造を軸として、ベンチャー・キャピタル、企業内ベンチャー/新事業、技術移転、イノベーションなど具体的な領域/テーマに照準が当てられ、当該フィールドでの実証研究を追求していく姿勢がみとられた。

一方、*JBV*創刊後の進展をみると、掲載論文数とその領域や分野が、『企業家研究』以上に大きく拡張していることがわかった（Article collections: 1991-2022<sup>4)</sup>）。また、その特徴は次の3つのレベルで特に顕著であった。

領域/学際性（the disciplines of economics, psychology, sociology, anthropology, geography, history and others）。

機能/分野（the functions of finance/accounting, management, marketing, and strategy and other functions such as operations, information technology, public policy, medicine, law, music, and so on）。

コンテキスト（the contexts of international and sustainability (environmental and social) and research from other contexts such as high uncertainty, dynamism, time pressured, emotional, and so on<sup>5)</sup>）。

*JBV*は、現在この3つのレベルで、進化、拡張し続けているといえよう。

#### IV 日本の企業家研究の「これまで」と「これから」の展望

企業家研究フォーラム発足により、企業家研究にどのような変化・発展がみられたのか。今後の企業家研究がめざす方向とは何か。

この統一論題の問いに対して本報告では、これまでの企業家研究の進展とJBVとの比較を通じておぼろげながら見えてきた課題点を、日本の企業家研究全般に広げて、私見を交えて以下の9点を指摘した。

それは、経営学分野に限定してではあるが、発展が十分とは言い切れない点とも言い換えられよう。

① テーマや領域の学際性、② 異質多次元な企業家概念/企業家活動論の広がり、③ 大胆で荒々しい分析/主張（現状は突出より平均志向）、④ 特定テーマの論争、⑤ 研究（者）と実践（実務家）の距離の大きさ、⑥ 研究方法・アプローチの深耕と広がり、⑦ 国内研究と海外研究の融合（現状は海外研究偏重）、⑧ 喫緊の現代的課題への研究アプローチ（例：パンデミック）、⑨ 日本発の現象と知見の世界への発信。

一方、企業家研究フォーラムにおいて進展がなかった訳ではない。テーマの広がりや深掘りは確実にあった。例をあげるときりがないが、「企業家と虚業家」、「起業家と研究者の関わり合い—起業家研究の方法としての二人称的アプローチと共働的な道具—」、「地域創生と企業家活動—ウィズコロナ社会におけるファミリービジネスの役割—」、「企業家の特異条件—狂気・異形・才覚—」、「倫理と経済のバランス」、「マイノリティとしての企業家・再論—ヨーロッパの経験を中心に—」など、企業家の概念/活動（精神）、その社会性や地域性について、長期にわたる現場や文脈へのこだわりと深掘りを通じて、研究と議論が積み上げられてきた。重要なことは、この研究蓄積を次のステージへアップデートし進化させることではないだろうか。

そのために、今回の報告では、日本の企業家研究がこれから目指す方向を検討する道標として、これまでの研究と実践の振り返り/原点回帰を提案した。それは企業家研究の「問い直し」と「再評価」（revisiting entrepreneurship）である。そもそも、欧米を中心に発展してきた企業家や企業家活動（精神）の概念とは、どのようなものであったのか。原点はどこで、論点は何で、議論はどこまで進んだのか。かつて大きな注目を集め今でも参照され続ける古典的論考の1つである Gartner, W. B. (1988) “Who is an Entrepreneur?” is the wrong question” や Venkattaraman, S. (1997) “The distinctive domain of entrepreneurship research” を読み直してみるのも、これからの企業家研究を展望するための新たな視点を得る1つの手段になるかもしれない。20年以上の歴史を経て、今、振り返ることで、見えてくる景色はこれまでと異なるのではないだろうか。我々が見逃していたり、切り落としたりしていた、大切な視点に気づくかもしれない。

最後に、報告では、私見ではあるが、本研究領域の発展のために重要と感じる点として、前述の指摘と重なるかもしれないが、「他領域からの学びと越境」、「特定領域/分野での健全な批判や

反論を通じた論争」, 「国内研究の再評価/深掘り (海外研究偏重の是正)」, 「方法論 (定性/定量) の妥当性と信頼性の再検討と発展」, ダイナミックな研究アプローチとして「Rigor (頑強性/厳密性)」「Relevance (学術的/実践的関連性)」「Bold (大胆さ)」「Broad (広がり)」, すなわち 2R&2B を提起した。ここでのやや “provocative” な報告が, 次の 10 年の, 企業家研究が大きく前進する小さなステップにでもなれば幸いである。

謝辞 『企業家研究』の資料の整理にあたって, 部分的に, 信州大学の藤野義和准教授に協力を頂いた。ここに記してお礼申し上げる。

注 \_\_\_\_\_

- 1) ここでは厳密に経営史系と非経営史系の論文を峻別した訳ではなく, 便宜上, 著者の判断で区別したに過ぎない。従って, 広くオーバーラップしているものがあることをご了承頂きたい。
- 2) 図で用いた年次区分は便宜上分けたに過ぎず, 特に時代背景を意識した訳ではない。
- 3) MacMillan, Zemann and Amoruso (1985) を参照。
- 4) <https://www.sciencedirect.com/journal/journal-of-business-venturing/special-issues> 参照。
- 5) <https://www.journalofbusinessventuring.com/about> 参照。

参考文献 \_\_\_\_\_

- 宮本又郎 (2004) 「企業家学の意義」『企業家研究』創刊号, 96-106 頁。
- Gartner, W. B. (1988) “Who is an Entrepreneur?” is the wrong question,” *American Journal of Small Business*, 12(4), 11-32.
- MacMillan, I. C., Zemann, L. and Amoroso, D. (1985) “Comments from the editors,” *Journal of Business Venturing*, 1(1), 5.
- Venkataraman, S. (1997) “The distinctive domain of entrepreneurship research. Advances in Entrepreneurship,” *Firm Emergence and Growth*, 3(1), 119-138.

